

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Review)

博士の専攻分野の名称 (Degree)	博士 (マネジメント)	氏名 (Author)	単 海 林
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title) 魯迅翻訳の研究とその周辺 ーテキスト分析と動機付けの解明を中心にー			
論文審査担当者 (Dissertation Committee)			
主 査	(Committee chair)	教授 盧 濤	印
審査委員	(Committee member)	教授 小柏 葉子	印
審査委員	(Committee member)	教授 林 幸一	印
審査委員	(Committee member)	准教授 松嶋 健	印
〔論文審査の要旨〕 (Summary of Dissertation Review)			
1. 概要 魯迅研究は、文学及び思想の面に重きが置かれて行われ、魯迅の創作活動と考え方の形成に深く影響を与えた翻訳活動に関する体系的な研究が欠けており、翻訳作品に関するテキスト分析も散見されるが、翻訳理論に立脚した、日本語原文と中国語訳の緻密な対照研究というような実証的研究が乏しいというのが現状である。このような背景の下で、本研究は、魯迅翻訳に関する先行研究の問題点を鋭く指摘した上で、テキスト対照分析という実証的な方法及び現代翻訳理論を援用しつつ、魯迅訳業の特徴ある時期を厳密に分けることに成功したばかりでなく、各時期における魯迅の翻訳法、翻訳ストラテジーと翻訳動機を明らかにし、その歴史的、現代的な意義を検証した。異文化接触とみなされるべき魯迅の翻訳活動に関する知見、結論は、異文化コミュニケーション研究と翻訳学の接点を見出したと同時に、「翻案」などのような極端的な帰化 (domestication) から異化 (foreignization) とされる「直訳」、「抵抗・異化ストラテジー」への翻訳方法シフトの検討を通して、翻訳ストラテジーの確立にとどまらず、翻訳の動機付け及び翻訳思想の形成を解明したというモデルが示されており、翻訳研究方法論の再構築を試みている。			
2. 論文の構成 本論文は、序章と終章を含めて8つの章より構成されている。以下は各章の概要である。 序章では、問題意識と研究の目的と方法を述べている。 第1章「魯迅翻訳の先行研究」では、志賀、工藤、山田等の研究と呉、顧等の研究を取り上げ、日本と中国における先行研究の問題点を指摘している。 第2章「関連翻訳理論について」では、本研究と関連を有する等価理論、直訳法と意識法、帰化と異化、翻訳倫理といった翻訳理論を検討している。			

第3章「魯迅の時期分けと初期翻訳」では、テキストの特徴を手がかりに魯迅翻訳の時期を分けた上、初期Ⅰと初期Ⅱの翻訳作品のテキストを詳細に分析し、帰化ストラテジーの特徴を明らかにした。

第4章「魯迅の中期翻訳」では、『現代日本小説集』、『思想・山水・人物』、『羅生門』の魯迅を詳しく検証し、直訳法、異化ストラテジー及び抵抗式翻訳への移転と確立のプロセスを分析している。

第5章「魯迅の後期翻訳」では、ソ連文芸論の翻訳と数本の小説の翻訳及び童話翻訳を取り上げ、魯迅翻訳には「直訳」、「抵抗・異化ストラテジー」が貫いていることを論じている。

第6章「魯迅翻訳の再認識」では、魯迅の翻訳活動の現代的意義を論じた上で、現代中国語の形成と現代中国文学及び現代美術の発展に対する魯迅翻訳の貢献を検討し、神格化された魯迅と異なる一人の文人としての「魯迅像」を浮き彫りにしている。

### 3. 論文に対する評価

本研究は、以下の3点より評価される。

第一は、魯迅の翻訳作品のテキスト分析を通して、翻訳理論の一部を立証すると共に修正を加えた。特に翻訳者行動研究に示唆が与えられた点が見受けられ、今後の翻訳者行動比較研究が期待される。

第二は、魯迅の翻訳活動を検証した結果、「革命家」としてイデオロギー的に神格化された従来の魯迅イメージとは裏腹に、一知識人としての魯迅像が浮き彫りにされ、魯迅研究いわば魯迅学の再構築に新しい視点を提示している。

第三は、魯迅の翻訳ストラテジーの検証を通して、異文化コミュニケーション教育の一環とみなされる翻訳教育と訓練に参考になる実践的意義も認められる。

以上、審査の結果、本論文の著者、単 海林は博士（マネジメント）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。